

第二十話 「約束を果たす姿勢」

篠田儀三郎（一八五二—一八六六）は白虎隊の中では年長者であった。

ある時、儀三郎は友人達と蛍狩りに行く約束をした。集合場所となったのは、後に白虎隊の生存者となる飯沼貞吉の家であった。

ところが約束の日は生憎の雨となつてしまつた。ほんのすぐ先も見えないほどのどしや降りである。この雨では残念ながら蛍を見ることはできない。蛍狩りの約束も自然消滅であろうと思ひ貞吉少年は残念がつた。ところが約束の時間近くになつて、家の戸を叩く者があつた。このような雨の日に一体誰が来たのだらうと戸を開けてみると、そこには雨具を纏い、蛍狩りに使う蛍籠とほうきを持つた篠田儀三郎が立つていた。驚いた貞吉少年は、「生憎の豪雨となり、これでは蛍狩りなど無理と思ひ、約束は自然消滅になつたものとおもつておりました。」と言つた。すると儀三郎は、

「私は今日蛍狩りをするために君の家を訪れることを約束した。一度約束をしたからには守らなければならぬ、蛍狩りができるかどうかは問題ではない。この雨で蛍狩りができないということであれば、後日あらためて蛍狩りをしようではないか。」

そう言うとき儀三郎は後日の蛍狩りを約束して再び雨の中を帰つていった。

貞吉少年はこの集まりでは最年少であつたのだらう。ゆえに貞吉の家を集合場所として選び、不測の事態にも自らが訪れることで約束が反故にならないようにとの年少者への配慮があつたのではないか。日頃の行動が年少者への手本となつたのである。